３年ＢＢＱ組

～俺たち稀代の陽キャ集団～

梗概

高校の新学期。クラス替えで３年Ｂ組には原陽助（17）を始め学年中の陽キャが集まり、稀代の陽キャ集団が形成される。

一方、３年Ｈ組は陰キャで占められることになり、戸部冬子（トウコ）（17）もその一人だった。

陽助と冬子、全く縁がないと思われた二人だったが、文化祭の出し物としてバンドを始めた陽助がバンドロゴの作成を冬子に頼んだことで、距離が急接近する。

二人が縁となり、陽キャたちと陰キャたちはバンドを通して交流を重ね、力を合わせて文化祭を成功させる。

陽助のバンドは学校の外でも噂になり、金の

臭いを嗅ぎつけた3年C組の財前がバンド活動への介入を始める。

財前は狡猾な立ち回りによって陽キャと陰キャの仲に割って入り、陰キャに渡るはずの報酬をピンハネする。

その中で、冬子は陽キャにとって陰キャの自分は取るに足らない存在であり、陽助に利用されていただけだと思うようになる。

やがて財前の悪行が知れ渡ることになり、冬子は自分の内なる弱みから陽助に偏見を抱いていたことに気づき、悔い改める。

冬子と陽助は互いを受け入れ、陽キャと陰キャは再び強い絆で結ばれるのだった。

《登場人物》

戸部冬子（17）　3年H組生徒
原陽助（17）　3年B組生徒

財前（18）　3年C組生徒
愛甲（17）　3年B組生徒
菜月（17）　3年B組生徒
坂本（18）　3年B組生徒
愛結（17）　3年B組生徒
屋敷（17）　3年H組生徒
さやか（17）　3年H組生徒
久慈（17）　3年H組生徒
進次（5）　坂本の息子

警官
音楽教師
その他

○テロップ
「この物語には陽キャに関して一部不正確な描写が見受けられるが、作者が陰キャであることを考慮し、そのままとする」

○清明高校・校門（朝）
桜が咲き誇っている。
登校する生徒らの姿。

○同・3年B組教室前
原陽助（17）、やってくる。
坂本（18）、壁によりかかっている。

陽助「坂本！」
坂本「よう」
陽助「（嬉しい）また一緒のクラスか！」
坂本「だな」
陽助「進次、元気にしてっか？」
坂本「仮面ライダーにドハマりしてるよ」
陽助「（笑う）学校に連れてこいよ。みんなで飯食おうぜ」

坂本「おう」

○同・3年B組教室

陽助、入ってくる。

陽助「（威勢よく）ちぃーーーす！！！」

愛甲、教壇机に座っている。

愛甲「陽助、おせえよ！！」

と教壇机から飛び降りる。

陽助「愛甲！」

陽助と愛甲、不敵な笑みを浮かべて向かい合う。

二人、息のあった動きでハンドシェイクを決める。

愛甲「…この一年、面白くなりそうだ」

陽助「（にやりと笑う）」

声「陽助！」

陽助、振り返る。

菜月（17）が愛結（17）と共に笑顔で陽助を見ている。

陽助「菜月！」

陽助、周りを見渡す。
華々しい容姿の面々。
陽助「…なんだ。皆揃ってんな」

○同・3Bの教室前
他のクラスの女子1、女子2、教室内を覗いている。
女子1「割れたね」
女子2「(頷く)」

○同・3年H組教室前
ドアの上に「3年H組」のプレート。

○同・3年H組教室
生徒全員、眼鏡をかけている。
生徒ら、息を潜めるようにじっと自分の席に座っている。
その中に戸部冬子(トウコ)(17)の姿。
女子2の声「割れた」

○同・中庭（昼休み）

弁当を食べる生徒らの姿。

校舎の屋上から煙がもくもくあがっている。

○同・屋上

陽助、愛甲、坂本、菜月、愛結など3Bの生徒ら、BBQをしている。

仮面ライダーのプリントシャツを着た進次（5）、トウモロコシを頬張っている。

陽助「進次！　うまいか！」

進次「うん！」

坂本「パパの焼いた肉も食え」

坂本、進次に串を手渡す。

陽助、クーラーボックスからビタミン炭酸マッチを取り出す。

陽助、マッチを勢いよく飲む。

陽助、むせて吐き出す。

近くにいた愛結、

愛結「汚い」

陽助「悪ぃ」
菜月、陽助にハンカチを渡す。
陽助「（受け取る）サンキュー」
菜月「ね。陽助は知ってる？」
陽助「ん？」
菜月「ウチらの学校に３年Ａ組がない理由」
陽助「（考えて）あの開かずの教室か」

○同・３年Ａ組教室前
ドアの上に「３年Ａ組のプレート」。
ドアが施錠されている。
室内は黒いカーテンで覆われており、中の様子を見ることはできない。

○同・屋上
愛甲、肉を頬張りながら、
愛甲「昔の３年Ａ組が伝説打ち立てて、それ以来使わないようにしたんじゃね？」
陽助「あー！　永久欠番的な！」
愛甲「それ！」

菜月「そんなわけないじゃん」
進次に肉を焼いていた坂本、
坂本「言い伝えでは…」

○同・3年A組教室前
施錠されたドア。
坂本の声「その教室は天地の間にありて、陽と陰が混じり合うとき、扉は開かれん」

○同・屋上
坂本「ってことらしい」
菜月「陽と陰？」
愛甲「意味わかんねーな」

○同・3H教室
生徒ら、自分の机に座って静かに弁当を食べている。
窓際の冬子、スケッチブックに桜の木の絵を描いている。

○同・昇降口（放課後）

帰宅する生徒らの姿。

○道

陽助ら３年Ｂ組の集団、車道を塞いで横一列で歩いている。

後ろからクラクションが鳴る。

陽助、振り返ると一台のパトカー。

警官、パトカーの窓から顔を出す。

警官「君たち、通行のじゃまだ！」

陽助「（屈託なく）お巡りさん！　すいません！　みんな道を開けろ！」

一同、歩道へあがる。

警官「学校の帰りか？」

陽助「はい！　これから皆で海いこうと思ってて。お巡りさんも一緒にどうすか？」

警官「（笑う）遊ぶのもいいがしっかり勉強しろよ！」

陽助「はい！」

パトカー、去っていく。

○別の道

パトカー、走っている。

パトカー、横断歩道の前でとまる。

3年H組の生徒ら、見事な縦一列で横断歩道を渡っている。

冬子、横断歩道を渡る。

最後尾の久慈（17）の横断中、警官、パトカーを発進させる。

久慈、轢かれそうになる。

パトカー、急ブレーキをかける。

警官「（顔を出し）すまん！　君の姿に気づかなかった！」

久慈「（ぼそっと）あ、平気です。存在に気づかれないことがよくあるんで…」

久慈、歩いていく。

○海

陽助ら、サーフィンをしている。

愛甲「アゲアゲでヒャッハーーー！！！」

○浜辺（夜）

陽助ら、花火をしている。

菜月「来月文化祭かー」

愛甲「陽助。去年お前んとこ何出した？」

陽助「え。なんだっけ」

坂本「去年もその前もＢＢＱだ」

陽助、考え込む。

菜月「…陽助？　どした」

陽助「なあ。せっかくメンバー揃ったんだし、今年は何か面白いことしてみないか」

愛結「たとえば？」

陽助「うーん」

菜月「あ！　バンドとか」

愛甲「いいじゃん、バンド！　俺ギター！」

菜月「じゃあ私ベースやる！」

愛結「決まるの早」

菜月「ボーカルは陽助しかいないっしょ！」

愛甲「頼むぞ！」

陽助「（笑顔で頷く）」

坂本「バンド名はどうする？」
陽助「3年BBQ組ってのはどうよ」
愛甲「何だよそれ」
陽助「いや、なんか思いついた」
菜月「ダサいけど、学生バンドって感じだし。
うん。いいんじゃない」
愛甲「だったらロゴも決めようぜ」
菜月「ロゴ？」
愛甲「ほら。BUMP OF CHICKENとかにも
あんだろ」
菜月「どういうの」
愛甲「こう、盾みたいな形になってて…（と
砂にロゴを描く）」
　陽助、愛甲らの姿を眺め、
陽助「ロゴか…」

○清明高校・廊下（翌朝）
　陽助ら3年B組の生徒、横幅いっぱいに
並んで登校する。

○同・美術室

陽助、画用紙にロゴを書いている。

陽助、隣で書く愛甲の絵を見る。

陽助「愛甲、それ、駐禁の標識か？」

愛甲「うるせえな。お前にいわれたくねえよ」

陽助の書いたロゴ、進入禁止の標識にしか見えない。

陽助、菜月のほうを見て、

陽助「菜月！」

菜月、画用紙を手にやってくる。

菜月「見たい？」

陽助「（頷く）」

菜月「えーどうしよっかなー」

愛甲「いいから見せろよ」

菜月「（自信ありげ）じゃーーーん」

と画用紙に書いたロゴを見せる。

陽助、愛甲「…」

菜月のロゴ、駐禁の標識にしか見えない。

陽助「…菜月、お前もか」

菜月「え？　よくない？」

陽助と愛甲、辺りを見回す。
3年B組の生徒らが書いたロゴ、見るに耐えないものばかり。
愛甲「おい！　このクラスどうなってんだよ！」
陽助、ふと壁を見上げる。
壁に展示された一枚の絵。
説明文には「清明市立図書館ロゴマークデザイン賞　金賞」とある。
陽助、洗練されたロゴに見とれる。
作者名に「戸部冬子」。

○同・3H教室（昼休み）
生徒ら、自分の席でじっとしている。
バーベキューの串を持った陽助、入口から顔を覗かせる。
陽助「戸部さん！」
冬子、声に反応して体をびくつかせる。
冬子、恐る恐る陽助を見る。
冬子、陽助と目が合う。

冬子、慌てて目を逸らす。
陽助、入口そばの生徒へ、
陽助「このクラスに戸部さんって子いる？」
生徒、冬子を指さす。

○同・廊下
陽助と冬子、向かい合っている。
陽助「俺、戸部さんの書いたロゴ一目みてアゲアゲになっちゃって。トランス感じたっていうか」
陽助、興奮して冬子に近づく。
冬子、一歩退く。
陽助「あのロゴって街の図書館で使われてるってことでしょ？」
冬子「（ぼそり）あ、たぶん」
陽助「すげー！　生きた証ー！」
陽助、ひとり興奮する。
冬子「…」
陽助、冬子を見つめて近づく。
冬子、退く。

陽助、手を合わせ、
陽助「戸部さんに頼みがあるんだけど！」

○空（夜）
月が出ている。

○同・冬子の部屋
冬子、机でノートにバンドのロゴを描いている。

○清明高校・廊下（回想）
陽助「（目を輝かせ）俺たち、文化祭でバンドしようと思ってて。戸部さんにバンドのロゴを作ってほしいんだ」
陽助、白い歯を見せて笑う。

○（戻って）冬子の部屋
冬子「眩しすぎだし…歯白すぎだし…BBQの匂いしすぎだし…」

○晴明高校・3B 教室前（翌日）

冬子、ノートを手にうろうろしている。

冬子、恐る恐る教室内を覗き込む。

菜月ら女子、スマホで動画を撮りながら踊っている。

冬子、怖じ気付く。

○同・3B 教室

陽助、冬子の姿に気づく。

○同・廊下

冬子、歩いている。

背後から、

陽助の声「戸部さん！」

○同・3B 教室

3B の生徒ら、輪を作って冬子の書いたロゴを見ている。

一同「おおー！！」

冬子、輪の外でおどおどしている。

愛甲「（冬子へ）これ、お前が考えたの？」
冬子「（頷く）」
陽助「（得意げに）すげえだろ」
愛結「別に陽助が作ったわけじゃないし」
　菜月、冬子の前に立つ。
菜月「戸部さんっていうんだ。わたし菜月。よろしくね（と微笑む）」
　冬子、背骨がひん曲がるほど頭を下げる。
菜月「…？」
愛甲「しゃー！　ロゴも完成したし、バンドやる気になってきたぜ！」
　一同、盛り上がる。
　冬子、そそくさと帰ろうとする。
陽助「（呼び止め）戸部さん！」
冬子「…」
陽助「お礼、何かするよ」
冬子「（首を振る）」
坂本「陽助のいうとおりだ。ただってわけにはいかない」
　陽助、何か思いつく。

陽助、ロッカーにいき、ロッカーから木箱を取り出す。

陽助、木箱を冬子に差し出す。

陽助「これ、ばあちゃんが送ってくれたマスクメロン。昼飯の後でみんなで食おうと思ってたけど、戸部さんにやるよ」

冬子、遠慮して受け取らない。

陽助「いいって」

陽助、冬子に手渡す。

愛甲「おう。そんならこれも持ってけよ」

愛甲、クーラーボックスを手にする。

愛甲、クーラーボックスを冬子の肩にかける。

愛甲「キンキンに冷えたマッチがたっぷり入ってる」

菜月、つけていたブレスレットを外す。

菜月、冬子にブレスレットを渡す。

菜月「ザギンで買ったお気に入りのブレスレット。戸部さんにあげる」

坂本「じゃー俺は…」

○同・廊下

冬子、クーラーボックスを肩に提げ、両手いっぱい荷物を持って重たそうに歩いている。

○戸部家・冬子の部屋（夜）

冬子、机に座っている。

机の上にマスクメロン。

冬子、マスクメロンをそっと抱きしめる。

冬子、ぎこちない笑みを浮かべる。

○清明高校・音楽室（翌日・放課後）

陽助ら3年B組の生徒、楽器を持って集まっている。

陽助「文化祭の曲、どうする？」

愛甲「やっぱバンプじゃねえの？」

陽助「（気乗りせず）バンプか…」

音楽教師、やってくる。

音楽教師「聞いたぞ。お前ら、バンド始めた

んだって？」
菜月「先生、お邪魔してまーす！」
音楽教師「やるならコピーバンドはやめておけ」
愛甲「は？　なんでよ？」
音楽教師「バンドはオリジナル曲に限る。シングストリートでも主人公の兄貴がそうアドバイスしてたろ？」
陽助「シングストリート？」
音楽教師「知らんのか。2016年のアイルランド映画だ」
陽助「俺、映画とか見ないんすよ」
愛甲「あ！　聞いてくれよ。俺さ、最近までパズーのことシータだと思ってて（と爆笑する）」
愛結「何の話？」
菜月「てか誰それ？」
愛甲「は？　菜月、お前天空の城ラピュタ観てねえの？」
菜月「全然」

愛甲「はあ？！」
音楽教師「（呆れて）ま。映画を必要としない人生ってのもある意味幸せだがな」
と出ていく。
陽助「オリジナルか」
坂本「（陽助へ）どうする？」
陽助「よし！　みんな！　バンドはオリジナル曲でいくぞ！　この中で曲書ける奴、名乗り出ろ！」
全員、沈黙。
陽助「…」

○同・3H教室（翌日・昼休み）
冬子、自分の席で弁当を食べている。
声「戸部さん！」
冬子、ぎくりとする。
冬子、声の方を見る。
入口で陽助が手を振っている。

○同・廊下

冬子、陽助、屋敷（17）、立っている。
冬子、屋敷を指して、
冬子「（ぼそり）同じクラスの…屋敷君…」
陽助「（屋敷へ）俺 B 組の原陽助。よろしくぅ！」
屋敷「（ぼそり）あ、はい」
陽助「戸部さんから作曲できるって聞いたんだけど」
屋敷「（ぼそり）あ、はい」
陽助「どんな曲？」
屋敷「（ぼそり）あ、ボカロです。昔からニコ動にあげてて」
陽助「再生回数とか聞いちゃってもいい？」
屋敷「（ぼそり）あ、全部合わせると 100 万とか」
陽助「ミリオン！　齢 18 で？！（と興奮する）」
屋敷「（ぼそり）あ、まだ 17 です」
陽助、屋敷の手を握りしめる。
陽助「（目を輝かせ）頼む。俺たちのために曲

を作ってほしい」

○同・3B 教室（数日後）

陽助ら 3B の生徒、ノートパソコンの前に群がっている。

ノートパソコンから曲が流れている。

輪の外で、屋敷、クーラーボックスを肩に提げ、両手いっぱいに荷物を持って突っ立っている。

菜月「（聴いて）いいじゃん」

愛結「うん」

陽助「（みんなへ）よし！　文化祭はこの曲をやるぞ！」

愛甲「おう！　早速練習だ！」

坂本「練習はいいけど、まだ曲に歌詞ついてないぞ」

陽助、一同を見渡す。

陽助「この中で作詞できる奴、名乗り出ろ！」

全員、沈黙。

以下カットバック

○同・音楽室（数日後）

室内に軽快なメロディが響く。

愛甲、菜月ら、3Bの生徒数人が楽器を演奏している。

陽助、食い入るように歌詞の書かれた紙を見ている。

そばでさやか（17）、クーラーボックスを肩に提げ、両手いっぱいに荷物を持って突っ立っている。

陽助、顔をあげると、満面の笑みでさやかへ親指を突き出す。

○同・3B教室（数日後）

黒板に「文化祭まで14日」の文字。

○同・音楽室

愛甲ら、演奏している。

陽助、マイクでシャウトしている。

○同・3H 教室

黒板に「文化祭の出し物決め」の文字。

全員、席に座ったまま沈黙している。

○同・廊下

陽助、冬子、屋敷、向かい合っている。

陽助、冬子と屋敷に両手を合わせて頼みごとをしている。

○同・3H 教室（昼休み）

冬子、席に座りバンドのポスターを描いている。

隣の席で、屋敷、ノートパソコンを使って作曲している。

○同・3B 教室（数日後）

黒板に「文化祭まで 10 日」の文字。

○同・屋上（昼休み）

愛甲ら、楽器で演奏している。

陽助、熱唱している。

進次、坂本に肩車されながら聴いている。

○同・3B 教室

完成したポスターが映し出される。

3B の生徒ら、ポスターを見つめている。

陽助、黒板にデカデカと書かれている「3年 BBQ 組」の文字に目をやる。

陽助、チョークを手にし、「＆H 組」と書き足す。

○同・3B 教室（数日後）

黒板に「文化祭まで 5 日」の文字。

○同・体育館

B 組男子と H 組男子、ドデカいスピーカーを二人で運んでいる。

○駅前

さやか、久慈らＨ組の生徒、「３年ＢＢＱ組＆Ｈ組」の宣伝チラシを配っている。
次々とチラシを受け取る通行人ら。
久慈、通行人にチラシを差し出す。
通行人、一顧だにせず素通り。

○清明高校・屋上（翌日・昼休み）
３Ｂと３Ｈの生徒ら、ＢＢＱをしている。
冬子、食べている。
と、冬子の頬に冷えたマッチが当たる。
冬子、驚いて振り返る。
笑顔の陽助がマッチを持って立っている。
冬子、キョドる。

○同・３Ｂ教室（数日後・放課後）
黒板に「文化祭まで１日」の文字。

○同・３年Ａ組の教室前
誰もいない校内。
教室内のカーテンが揺れ、閉ざされたド

アがかたこと揺れる。

カットバックおわり

○同・校門（翌日）

「清明文化祭」のアーチがかかっている。

○同・２年Ｇ組教室

縁日が催されている。

射的やヨーヨーすくいを楽しむ客の姿。

○同・体育館入口

冬子の描いたポスターが貼られている。

○同・体育館

暗い室内。

大勢の客が舞台の前に集まっている。

○同・同・舞台裏

冬子、隅っこに突っ立っている。

陽助、やってくる。
陽助「戸部さん！」
陽助、冬子にキティちゃんの玩具を投げ渡す。
冬子、慌ててキャッチする。
冬子「（玩具を見て）…？」
陽助「射的で取った景品。ドラえもん狙ったんだけど。よかったら戸部さんにあげる」
冬子「（頭を下げる）あ、ああありがとうございます…一生…たた大切にします」
陽助「（吹き出す）前から思ってたけど戸部さんって面白いよね」
冬子「へ？」
冬子、あたふたして、
冬子「つ、つまんないです、根暗です、ド陰キャです」
陽助、笑う。
陽助「俺、三年になるまで全然戸部さんとか、屋敷とかと話したことなかったけど、なんか一緒にいると新しいもんをどんどん生み出せ

る感じがして。毎日がワクワクしてさ。だから俺、戸部さんといると面白いよ」

冬子「…」

菜月の声「陽助！」

菜月ら、楽器を持って立っている。

陽助「（冬子へ）いってくる！」

冬子「あ、い、いいいって…」

陽助、去る。

陽助、3Bの生徒らと円陣を組んでいる。

冬子「（か細く）らっしゃい」

○同・体育館

室内に歌声が響きわたる。

盛り上がる客。

陽助、マイクで熱唱している。

○同・同・舞台袖

冬子、カーテンの隙間から陽助を見つめている。

冬子、自然と笑みがこぼれる。

○同・校門（一ヶ月後・朝）
アジサイが雨に濡れている。

○同・3年C組教室前
ドアの上に「3年C組」のプレート。

○同・3年C組教室
財前（18）、席に座っている。
机の上にジュラルミンケース。
財前、ケースを開ける。
中に大量のヤクルト1000が入っている。
財前「（にやり）メルカリに出せば3万にはなるな…」
財前、スマホのカメラでヤクルト1000を撮影する。
C組生徒1、やってきて、
C組生徒1「財前さん、またずいぶんと仕入れましたな」
財前「この雨の中、朝からヤクルトレディに

張り付いた甲斐がありましたよ」
C組生徒2、やってきて、
C組生徒2「私は今月利益が出ません」
C組生徒1「私もです。マスクとトイパー不足の時は笑いがとまらなかったんだがなあ」
財前、ジュラルミンケースを閉じる。
財前「ところで知ってますか？　3年B組のバンドの件」
C組生徒2「ええ。"3年BBQ組＆H組"。文化祭で披露して以来もっぱらの評判らしいですね」
C組生徒1「SNS上でも話題になってます」
財前「うむ」
財前、考え込んでいる。
C組生徒2「財前さん、その顔、何か企んでますな」
財前「（にやり）」
○同・3年H組教室（昼休み）
生徒ら、席に座って弁当を食べている。

財前、入ってくる。

財前、教壇に立つ。

財前「（大声で）注目！」

生徒ら、財前を見る。

財前「（高圧的に）箸をおけ。これより３年BBQ組＆H組、略してBBQ組の件でお前たちに大事な話をする。意見のある者は手をあげてから発言するように」

冬子「…？」

財前「お前たちも知っているように今BBQ組がトレンドになっている。今後バンドは学校外へと活動の場を広げていき、SNSなどで露出する機会が増えるだろう。それにあたって一つ大きな問題がある。お前たちH組の存在だ」

財前、生徒らを見回す。

財前「はっきりいおう。B組の生徒たちはバンドイメージの観点から陰キャであるお前たちH組との表立った交流を避けたいと考えているようだ」

冬子「…」
財前「物事には自然な形というものがある。陽キャと陰キャ。所詮は生きる世界が違うということだ。そのことを肝に銘じてこれから学校生活を送るように。以上。何か意見はあるか？」
　生徒ら、沈黙している。
冬子「…」

○同・廊下
　冬子、歩いている。
声「戸部さん！」
　冬子、ぎくりとして振り返る。
　笑顔の陽助が立っている。
陽助「戸部さん！　俺たちさ、他の高校の文化祭でもバンドしようって話になって！　戸部さんたちも一緒にくるだろ？」
　冬子、うつむく。
陽助「（訝しげに）戸部さん？」
冬子「…ごめんなさい」

冬子、そそくさと去る。

陽助「…？」

○同・3B 教室（数日後）

3B の生徒ら、集まっている。

愛甲「H 組の奴ら、最近いやによそよそしくねえか？」

菜月「あ。それ思った。話しかけてもスルーされるっていうか」

愛甲「何だってんだ急に。勢いに乗って海外進出しようってときにようぅ」

坂本「海外は早いだろ」

菜月「陽助。なんか知らない？」

陽助「…いや」

声「何かお困りごとでしょうか」

陽助ら、振り返る。

財前、入口ににこやかな顔で立っている。

坂本「…お前は C 組の財前」

愛甲「C 組？　何の用だよ？」

財前「いえ、もしかしたら H 組のことでお悩

みかと思いましね。何しろ奴らは気難しい連中でして」
愛甲「お前、なんか知ってんのか？」
財前「今やＢ組の皆さんは学校内外で押しも押されぬ人気者だ。一方でＨ組はどうです？相も変わらず昼食は独りぼっち。誰とも会話することなく一日を終える」
坂本「何がいいたいんだ？」
財前「僻み根性ですよ。連中ときたら、口には出さないくせに裏ではあなたたちを妬んでるんですよ」
陽助「…」
財前「ああいう人種には近づかないに越したことはありません。もともと皆さんとは生きる世界が違うんです」
愛甲「…でもよぅ、あいつらの力がないと」
財前「それでしたら私にお任せください」
陽助「どういうことだ？」
財前「今後、私がＢ組とＨ組の仲介役として万事滞りなくバンド活動のお手伝いをさせて

頂きます」

○同・3年H組教室（翌日・昼休み）

生徒ら、席に座って弁当を食べている。

財前、入口にやってくる。

財前「戸部冬子！　屋敷太一！」

冬子と屋敷、財前を見る。

○同・廊下

冬子、屋敷、財前、立っている。

財前、ビニール袋を手にしている。

財前「B組の皆様から仕事の発注だ。新曲と新しいポスターを作れ」

財前、ビニール袋からマッチを二本取り出す。

財前「賃金だ」

と二人へマッチを渡す。

○（回想）3年B組教室

マスクメロンの入った木箱やクーラーボ

ックス。服や帽子、腕時計やアクセサリーなどが机に山積みになっている。

陽助「俺たちからの気持ちだ。戸部さんたちに渡してくれ」

財前「もちろんです」

○（戻って）廊下

財前「納期は一週間だ。遅れるなよ」

財前、去る。

屋敷、マッチを強く握りしめる。

唇を噛む屋敷を見て、

冬子「…」

○戸部家・冬子の部屋（夜）

冬子、机でポスターの絵を描いている。

机の棚にキティちゃんの玩具が飾られている。

冬子、キティちゃんの玩具を手に取り、

冬子「（寂しげに見る）」

○清明高校・屋上（翌日・昼休み）

陽助ら、BBQをしている。

陽助「（興奮して）ガチか？！」

坂本「ああ。家内の兄貴が俺たちの曲を気に入ってギロッポンのライバハウスをタダで貸してくれることになった」

愛甲「しゃーーー！！！」

菜月「それ、客呼んでやるってことだよね」

坂本「もちろん」

菜月「タダで？」

愛甲「金とんに決まってんだろ。なあ？！」

陽助「（笑う）チケットの値段、どうする？」

菜月「（手をあげる）はい！　5000円！」

愛甲「高っ」

菜月「100円？」

愛甲「安っ」

菜月「じゃあ…」

声「500円」

一同、振り向く。

入口で財前がにこりとして立っている。

財前「500円でそのチケット、私にすべて買い取らせてください」

○同・3年H組教室

財前、教壇に立っている。

財前「5000円だ」

財前、手作りのチケットをかざしている。

財前「明日行われるBBQ組の単独ライブ。一枚5000円で売ってやる」

生徒ら、沈黙している。

財前「どうした？　陰キャのお前たちがどんなに足掻いても届かない雲の上の人気者たちを樋口一葉一枚で見られるんだぞ！」

○六本木の街並み（翌日・夜）

○ライブハウス

ステージでシャウトする陽助。

盛り上がる客たち。

○同・楽屋

陽助ら、汗まみれになっている。

陽助「あー。楽しかったー」

菜月「好きなことして稼げるって最高」

陽助、封筒を手にする。

陽助、封筒から万札を取り出す。

陽助「（数えて）10万の収入」

愛甲「俺たち、すごくね？」

菜月「ね。そのお金でぱーっと遊ばない？」

陽助「いや」

陽助、坂本に万札を差し出す。

坂本「…？」

陽助「ライブができたのは坂本のおかげだ。これで奥さんや進次にシースーでも食わせてやれ」

坂本「でも」

坂本、周りを見る。

一同、笑顔で頷いている。

坂本「悪いな」

と受け取る。

愛甲「なー。次の活動はどうするよ？」
菜月「他校の文化祭巡りっしょ」
坂本「一つ考えたんだが、もっとビッグになるにはSNSに力を入れるべきだと思う」
菜月「Twitterとかインスタとか？」
愛甲「だったらオフィシャルサイトを作るってのはどうよ？」
菜月「いいじゃんそれ！」
陽助「サイトか」
陽助、一同を見渡し、
陽助「よし！　この中でサイト作成できる奴、名乗り出ろ！」
全員、沈黙。
坂本「（ぼそり）H組の奴らなら…」
陽助「…」
声「私にお任せください」
入口に財前が立っている。
愛甲「またお前か」
財前「（にこやかに）ライブ、お見事でした」
陽助「…何の用だ？」

財前「必要とあらば皆さんのためにこの私めが然るべき人材を見つけて参ります」

○晴明高校・3年C組教室（翌日）

財前、席に座りスプーンでマスクメロンを食べている。

財前、スマホで電話をかける。

財前「こい」

財前、電話を切る。

財前、マスクメロンを食べる。

入口からD組の相田がやってくる。

相田「失礼します！　D組の相田です！」

相田、財前の前に立つ。

財前「B組様からサイト作成の発注があった。私の代わりに適当な人材を探せ」

財前の足下に大きな紙袋と小さな紙袋。

財前、小さな紙袋を手にすると、

財前「賃金だ」

と相田に渡す。

○同・３年Ｄ組教室

相田、机に座っている。

入口からＥ組の飯田がやってくる。

飯田「失礼します！　Ｅ組の飯田です！」

飯田、相田の前に立つ。

相田「元請けのＣ組様からご依頼があった。俺の代わりにサイト作成ができる人材を探せ」

相田の足下に小さな紙袋とさらに小さな紙袋。

相田、さらに小さな紙袋を手にすると、

相田「賃金だ」

と飯田に渡す。

○同・３年Ｅ組教室

飯田、机に座っている。

入口からＦ組の植田がやってくる。

植田「失礼します！　Ｆ組の植田です！」

○同・３年Ｆ組教室

植田、机に座っている。

入口からＧ組の江田がやってくる。
江田「失礼します！　Ｇ組の江田です！」
○同・３年Ｈ組教室
江田、ずかずか入ってくる。
江田「サイト作成できる奴おるか！」

×　×　×

Ｈ組男子１の机の上に一本のマッチ。
屋敷、Ｈ組男子１の前に立つ。
屋敷「…サイト作成の話は無視しろ」
Ｈ組男子１「…」
屋敷、マッチを手に取る。
屋敷、床にマッチを叩きつける。
屋敷「（叫ぶ）わかったろ！　Ｂ組の奴らは最初から俺たちのことを仲間だなんて思ってなかったんだ！」
冬子「…」
屋敷「…戸部」

冬子「え？」
屋敷「あいつらのためにポスターなんか書くなよ」
冬子「…」

○戸部家・冬子の部屋（深夜）
冬子、机に座っている。
目の前に描きかけのポスター。
冬子「（ため息）」
冬子、キティちゃんの玩具を見つめる。
冬子「よし。もう一息」
冬子、眠気眼をこすってポスターを描き始める。

○清明高校・廊下（数日後・朝）
冬子、歩いている。
冬子、陽助の姿が目に入り、はっとして立ち止まる。
冬子、カバンからポスターを取り出す。
と、陽助のもとに菜月がやってきて、

菜月「陽助！　ティックトック撮ろ！」
菜月、陽助の腕を掴む。
菜月、スマホを構える。
陽助と菜月、顔を近づけて、
陽助「アゲアゲ！」
菜月「二人はアゲアゲ！」
とはしゃぐ。
冬子「…」
冬子、嫉妬とも憎しみともいえぬものがこみ上げる。
冬子、踵を返す。

○同・中庭（翌日）
冬子、歩いている。
声「戸部さん！」
冬子、立ち止まる。
陽助、やってくる。
陽助「ねえ！　今度俺らとH組のみんなで海でサーフィンでもどう？　夏も近いし」
冬子「…」

陽助「戸部さん？」

冬子「…もう私に話しかけないでください」

冬子、足早に去る。

陽助「…」

○同・3H 教室前（放課後）

冬子、窓の前でぼんやりと景色を眺めている。

さやか、隣にやってくる。

冬子「（気づいて）…」

さやか「遠いね」

冬子「…？」

さやか、振り返って廊下を見る。

廊下の奥にぽつんと3年B組の教室が見える。

さやか「こんなに遠かったっけなあ」

冬子「…」

○同・屋上

陽助、夕日を見て黄昏ている。

○同・昇降口（数日後・朝）
激しい雨が降っている。

○同・音楽室
陽助ら、集まっている。
愛甲「おい。サイトはまだできないのか？」
菜月「ポスターも曲もまだだし」
陽助「もういい」
坂本「しかし」
陽助「もうH組は忘れよう。きっと俺たちが無理に付き合わせてしまったんだ」

○同・トイレ
財前と江田、きょろきょろ見回している。
財前「誰もいないな」
江田「はい」
財前「聞かれてはまずい話だ」
江田「間違いなく誰もいません」
二人の目の前に久慈が立っている。

財前「サイト作成の件はどうなってる？」
江田「すいません！」
財前「適当な人材を見つけろと命じたはずだ。そのためにB組の連中から報酬を受け取ってるんだ。君は私の信用をなくすつもりか」
江田「とんでもありません。しかし報酬といいましても私の手元に下りてくる頃にはほとんど残っていない状態で。そこからさらに私の取り分を引くと炭酸ジュース一本。ジュース一本では」
財前「（遮って）言い訳は聞きたくない。それとポスターと作曲の件もだ。納期はとっくに過ぎてる！」
江田「それは私の案件ではなく財前さんの…」
財前「私に口答えするつもりか！」
江田「…」
財前「陽キャと陰キャを分断し、金脈を生み出したのは誰だと思ってるんだ！」
江田「申し訳ありません！」
財前「この金脈を閉鎖するわけにはいかん。

卒業まで吸い尽くしてくれるわ！」
久慈「…」

○同・3年H組教室
生徒ら、席に座っている。
久慈、手をあげる。
が、誰も気づかない。
久慈「あの…」
生徒ら、久慈を見る。
久慈「誤解だったんです。B組の人たちは悪くないです」
冬子「…？」

○同・トイレ（回想）
財前「情けなど無用！　俺たちは商キャ！ピンハネしてナンボのもんじゃい！」

○（戻って）3H教室
久慈「てなわけでして」
屋敷「じゃあ…」

久慈「ええ。悪いのは商キャの人たちです。だけど…だけど、自分たち、どこかでＢ組の人たちと壁を作っていませんでしたか？　自分とは違う人たちだと思っていませんでしたか？　自分たちはその弱みに付け込まれてしまったんじゃないでしょうか」

冬子「…」

さやか、手をあげる。

さやか「文化祭、覚えてる？　Ｂ組と私たち、それぞれに合った役割があって、お互いに違うタイプなのに、不思議と一つになれた」

久慈「ええ、楽しかったです」

さやか「戸部さんが描いたポスターも、屋敷君が作った曲も、あの人たち、素直にすごいといってくれた。先生や他の生徒はウチらを見た目だけで判断するのにあの人たちは違った。あの人たちだけはウチらを対等に扱ってくれた」

冬子「…」

さやか、一同を見て、

さやか「仲間じゃないって決めつけてるのはウチらのほうじゃないのかな？」

屋敷「（俯く）…」

冬子、立ち上がる。

一同「…？」

冬子、決意を固めた表情で出ていく。

○同・廊下

冬子、歩いている。

冬子、3G 教室前にやってくる。

江田、冬子の前に立ちはだかり、

江田「陰キャはこの先立ち入り禁止や」

冬子、無視して通り過ぎる。

江田「おい！」

冬子、3F 教室前にやってくる。

植田、薄笑いを浮かべて冬子を見ている。

植田「（くすくす）」

冬子、無視して通り過ぎる。

冬子、3E 教室前にやってくる。

飯田や 3E の生徒ら、ひそひそ声で話し

ている。
声「なんで陰キャがここにいんだよ」
声「一緒にいると迷惑だって気付けよ」
声「B組のみんながかわいそう」
冬子、それでも一歩一歩踏みしめるように前に進んでいく。

○同・3C教室前

冬子、やってくる。
財前、待ちかまえている、
財前「何だ。賃上げ交渉でもしにきたか？」
冬子「…どいてください」
財前「どこへいくつもりだ？」
冬子「私たちの間にある誤解を解きにいきます」
財前「誤解？　厳然たる事実じゃないか」
冬子「…」
財前「陽キャと陰キャには生まれながらにして越えられない壁がある。これのどこが誤解なんだ」

冬子「…」

財前「だからこそ私のような仲介役が必要なんだよ」

冬子、歩き出す。

財前、冬子の手を掴む。

冬子「…離してください」

財前「大人しく引き返せ。そうすれば賃上げ交渉くらいは応じてやる」

冬子、財前の手を振り払って歩き出す。

財前、冬子を追いかける。

と財前の足が止まる。

財前「？！」

財前、振り返る。

さやかと久慈、財前の体を取り押さえている。

財前、もがくが動けない。

財前「（さやかへ）女！　なんてパワーだ！」

冬子、さやかと久慈を見つめる。

さやか、久慈「（頷く）」

冬子「（頷く）」

冬子、歩き出す。
財前「ま、待て！」

○同・3年B組の教室前
冬子、立ち止まる。
冬子、大きく深呼吸する。
冬子、ドアに手をかける。

○同・3年B組教室
賑やかな室内。
冬子、入ってくる。
冬子「あ、あのっ」
生徒ら、誰も気づかない。
冬子「あ、あのっ！」
生徒ら、冬子の姿に気づき、静まる。
陽助「（冬子を見て）…」
冬子「み、みみみなさんに、つ、伝えたいことがあってきました」
愛甲「あ？」
冬子「わわわわわわ私は…私は…」

愛甲、緊張する冬子へ、
愛甲「おい、なんか知んねえけど無理する…」
陽助、愛甲を制止する。
冬子「（目をつぶり）わ、私、陽助君に面白いっていわれて嬉しかった！」
陽助「…」
冬子「私が描いたロゴやポスターを、みなさんに受け入れてもらえて嬉しかったです」
一同、じっと聞いている。
冬子「なのに、私はあなたたちを受け入れることができなかった。私は、あ、あなたたちを見ると自分が惨めに思えたから！　だ、だから、あなたたちから逃げてた！」
陽助「…」
冬子「でも、もう逃げたくない…生きる世界が違うかもしれないけど…越えられない壁があるかもしれないけど…迷惑だし気持ち悪いと思われるかも知れないけど…私、あなたたちから逃げたくない！」
冬子、肩を震わせて荒い息を吐く。

陽助「…戸部さん」

菜月、愛結ら女子、冬子のもとへいく。

菜月、冬子を抱き寄せる。

菜月「私たち、あんたのことそんなふうに思ったことないよ」

冬子、目頭を抑える。

財前、やってくる。

財前「(冬子へ)B組の皆さんになんて口をきくんだ！」

財前、冬子を引きずり出そうとする。

坂本、財前の手を掴む。

坂本「(財前の腕時計を見て)H組にあげたはずの俺の時計…」

財前、腕時計を手で覆い隠す。

坂本「どうやら影で随分と甘い汁を吸っていたようだな」

財前「(焦って)皆さん、お騒がせして申し訳ありませんでした。このような無礼がないよう次回よりはしっかりと契約書を作成し、コンプライアンスを遵守…」

陽助「(遮って) 財前。お前さ、つまんねえんだよ」

○同・廊下

陽助ら、財前に詰め寄っている。

愛甲、指をポキポキ鳴らす。

財前「(顔がひきつる)ぼ、暴力はいけない！」

財前、後ずさりする。

財前の背後に相田、飯田、植田、江田の姿。

財前「退け！」

財前ら、じりじりと後ずさりする。

にじりよる 3B の生徒ら。

財前ら、H 組の教室前まで引き下がる。

財前、はっとする。

屋敷ら H 組の生徒が廊下で横一列になって待ちかまえている。

財前「陰キャのくせに横編成だと？！」

江田「に、逃げる隙間がない！」

屋敷ら、財前らににじりよる。

財前「（悲鳴）う、うわあああああああああああああああああああああ！！！」

×　×　×

財前ら、ボコボコにされて倒れている。
屋敷の正面に陽助の姿。
屋敷、陽助と向かい合う。
陽助と屋敷、息の合った動きでシェイクハンドを決める。
陽助、屋敷「（笑顔）」
冬子「（微笑む）」
菜月「見て！」
3A 教室のドアがかたこと揺れている。
揺れが激しくなり、ドアの鍵が外れて床に落ちる。
冬子「…？」
坂本「（つぶやく）その教室は天地の間にありて、陽と陰が混じり合うとき、扉は開かれん」
陽助、ドアの前に立つ。

陽助「（冬子へ）戸部さん」

冬子「（頷く）」

冬子、陽助の隣に立つ。

二人、ゆっくりとドアを開ける。

○同・３年Ａ組教室

冬子と陽助、入ってくる。

机の上に大量のビール瓶が置かれている。

Ｂ組とＨ組の生徒ら、続けて入ってくる。

陽助、ビール瓶を掴んでにやりとする。

陽助「みんな！」

陽助、ビール瓶を思い切り振り、

陽助「（叫ぶ）俺たち今日から３年Ａ組だあああああ！！！」

一同によるビールかけが始まって…

（おわり）